

(冷静に)

「あなた、生放送なんかやりながら私で散々遊んでいたのに、自分のことばかりだつたじやない」

「カメラに背中を向けながら私の上に乗つかつてレイプして、生放送なんかしてる意味あつたの？目の前にいる人間も第三者も雑に扱つて、自己満足も甚だしいわね」

(少し戸惑いながら)

「へ？いや、なんでそんなに急に喋るの、つて：別に、深い意味は、ないけど…」

(徐々に声が小さくなり)

「いや、ほんと、深い意味は：あんまりない…」「あ、あんまりってのは…！その…」

(少し声を荒らげて)

「ああ、もう！もうこんなことになっちゃうなら全部言つてあげるわよ！」

(恥ずかしそうに)

「さっきまで、動けない状態で、ち、乳首とか、スカートの中とか、いじられて…れ、レイプまでされて、その…気持ちよかっただの…」

「それに、顔も居場所もわからない人達に見られてるって考えたら…その…こ、興奮したの…」

「さ、さっき興奮してないって言つたのは…嘘、です…」

(少し声を荒らげて)

「し、仕方ないでしょ！こんなこと、あんな状態で口にしたくなんかなかつたの…」

(恥ずかしそうに)

「でも、もう抑えられない…あなたがレイプしてる途中、溶けるくらい気持ちよくて…
その…」

「あなたが、もっと欲しくなった…」

(懇願するように)

「だから…もう一回…もう一回、私にお仕置してよ…」

(恥ずかしそうに)

「理由なんかどうでもいいわよ、なにか適当に作ってくれれば…」

(キヨトンとして)

「え、人に見られて犯されたことを興奮した変態に対してのお仕置…?」

(照れながらも少し嬉しそうに)

「ふふ、あなたにしては頭の回った内容じゃない」

「それに…そのお仕置、すつごい興奮する…」

「あなたも大バカだけど、私も大概ね。こんなことで興奮しちゃうなんて…」

(囁くように)

「ねえ…ちゃんと、気持ちよくしてね？ちゃんと、イかせてね？あなたのしきなおちんちん、私の中で熱くなつてね？」

「ふふ、いい子。好きよ、あなたのそういうところ」

(冷静になりながら)

無題のテキスト

「ほら、こっち来て、もう我慢させないで」「何？床でやるわけないでしょ？制服のまま寝つ転がつたら汚れちゃうし、そもそもカメラに入らないでしょ？」

（小さく呟くように）

「よいしょっど…あと、これも、よいしょっ…」

（冷静に）

「ほら、こうやって机を繋げて、その上に私が横になればいいでしょ？うん、ちゃんと画面に入つてるね」「さてと…もう準備はできたわよ」

（囁くように）

「あなたの、コ・コ・も、準備完了みたいね…こんなに固くしちゃって、淫乱もいいところね…」

「私の下も、すっごい濡れちゃってる…私のココが、あなたのおちんちん、欲しがってるわよ…」

(欲しがりながら)

「早くう…早く、私の中に入れて?私のこと、犯して?」

(恥ずかしそうにしながらも嬉しそうに)

「んっ…ふふ、強引ね…自分から押し倒しちゃうなんて、本当に変態…」

(小さく喘いで)

「あっ…んんっ…乳首っ、きもちい…摘まれたりつ…カリカリされるのつ…あっ…すっご

無題のテキスト

いきもちいい…」

「もうつ、やばいっ…下、ぐちゅぐちゅつ…ねえつ、早くつ…早く入れてよお…」

「そうつ、あなたのおちんちん…ここに、入れてつ…」

(喘ぐように)

「んああ…！やあ…おちんちんで、クリ、いじらないでえ…！無理つ、無理い…焦らす
なあ…バカバカつ…ああつ…」

「んつ…んんーつ…！んあつ…は、入つた…」

(小さく呟くように)

「ねえ…入つたんだから…早く動かしてつ…？」

「ああつ…やだつ…そんなゆつくりじや…ダメえ…」

「お願いつ…もつと、もつと激しくつ…激しくしてえ…」

(激しめに喘ぎ)

「あつ…！あああつ…！そう、そう…！それつ…それが、欲しかったのつ…！あああつ…！」

「やだつ…止めないでつ…もつと、もつとちょうどだいつ…！止めないでえ…！」

「あつ、あつ…！ああつ…んんーつ！もうつ、やばつ…やばいつ…！い、イきそうつ…！イッちゃう…！」

(喘ぎが少し小さくなり)

「んあつ…あなたもつ、イきそう…？ふふつ…そつか…あんつ…」

「じやあつ…またつ…一緒につ…イこ…？」

「ねえつ…抱きしめ、させてつ…？」

「んつ…あつたかい…あなた、いい匂い…」

「ねえつ…イかせて…」

無題のテキスト

(激しく喘いで)

「あつ…ああつ…！んんつ…！はあ、はあつ…あああつ…！」

「いく…！い、イツちやうつ…！」

「んんつ…！あつ…あつ、あつ…んあつ…！ああつ…！」

「熱つ…！熱いつ…！中、熱いい…！あああつ…！」

(ぐつたりしながらもビクビクして)

「はつ…はつ…はあつ…はあ、はあ…はあ…」

(疲れたように喘ぎ)

「い、イツた…しゅごく、イツちやつた…きもちよかつた…はあ、はあ…」

(疲れたように)

「あなた、精子…出しそぎ…こんなに、出したら…やばいって…」
「んっ…はあ…今回は、ゆっくり、抜いてくれるのね…ふふ…」

(途切れ途切れで)

「はあ…やば…生放送…視聴人数…200人だって…もう、学校なんか来てられないわね…
はあ、はあ…」

(我に返ると後悔するように)

「はああ…何やつてんだろう、私…こんな淫乱な真似して…」

(呆れたように)

「ねえ、もういいでしょ…何が、って、生放送よ。もう満足したでしょ?…もう止める

わよ」

「よし、生放送終わり…はあ、あなたのバカに付き合って、私までおかしくなっちゃつた…」

（少し楽しかったようで落胆はしておらず）

「でも、楽しかっただし、すごく興奮したわ。あなたに、変な性癖を見つけられちゃつたわね。ふふつ…」

（冷静に）

「あなただつて、すごく楽しそうな顔してたわよ？自分では気づいてなかつたと思うけど、息を荒らげて必死に腰動かして…まるで獣だつたわ…」

「でも、別にいいわ。私もあなたも楽しかつたなら、それでいいわよね」

（囁くように）

「ねえ、これで終わりにするなんて言わないわよね？今日だけで終わりだなんて、そんな馬鹿なこと言わないでよね？」

「これからも私に…お仕置、たくさんしてね？」